

令和7年（2025）度 第1回 大阪府立西成高等学校 学校運営協議会 議事録

- 【日 時】 6月7日（土）13：00～15：00
【場 所】 大阪府立西成高等学校 多目的室 A
【出席者】 （会長）西田芳正委員（副会長）高見一夫委員 稲田智英委員 榎井縁委員
田中俊英委員 稲嶺一夫委員 堂上勝己委員 村上由紀委員

【内 容】

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 委員紹介及び会長・副会長選出
4. 議事
 - (1) 今年度の重点取り組み事項について
 - (2) 生徒の現状について
 - ①各学年の様子（各学年主任）
 - ②「学校生活と人権アンケート」結果について（こども人権室長）
 - (3) その他
 - ①進路
 - ②学校経営推進費
5. 閉会

【事務局からの説明および各委員からの意見等】

（1）今年度の重点取り組み事項について

（山田校長）

本校の現状

新入生のうち、小・中学校で不登校経験のある生徒は約4割である。昨年度、全校生徒のうち223名が30日以上欠席であった。これはおよそ本校生徒の4割にあたる。ただし、本校では、登校状況が少々不安定な状況であっても進級や卒業ができる仕組みになっている。その意義は、進級・卒業ができたという成功体験自体が、未来を切り開いていくことができるきっかけになると考えているからである。また、今年度の1年生は遅刻が少なく、2年生は昨年度より遅刻・欠席が増えており、3年生は昨年度と変わらずといった現状である。ステップスクールになり、このことを受け止め、今後の学校経営の方針に活かしていきたい。

めざす学校像

方針は変わらず「学びと福祉の結合による生徒の自信と勇気を育む学校」。中期目標はエンパワメントスクールからステップスクールになるにあたり令和6年度に新たに設定したため、前年度と大きくは変わっていない。変わった部分は、ステップスクールの完成年度（来年度）にむけて、2年目にあたるため、2年生での新設科目、例えば『にしなり学』などを中心に丁寧に進めているところである。

今年度の1年生では、日本語指導が必要な生徒が3名在籍している。ある日本語指導が必要な生徒は、

アセスメントをする中で「文字を書く」ということに自信がなく書く文字が小さいが、会話の中では思考力・判断力は高校生の水準以上の力があるとわかった。しかし、うまく表現ができない。また、日本人の生徒であっても、持ち合わせている言語能力が危機的な状況にあり、言葉を大切にしていける授業が必要であると考えている。本を読みなさいと言ったときに何となく文字を読むことができて、機能的な識字ができていない。そのような力を育てるには、成人識字教育的な取組みが重要であると考えている。特に、生活と地続きの社会問題を取り上げていきたい。なぜなら『チャレンジ』（総合的な探究の時間）の中で、生徒にとって自分の生活と地続きになっているような社会問題をテーマに生徒に感想を書かせると溢れるほどの言葉が文字として出てくる。教科の授業でも、生徒には学びの振り返りを、自分の手で書かせるよう教員にお願いしている。大学進学ではなく、高校を卒業することに重きを置いており、暗記重視や、大学入試に使うような知識ではなく、課題に対応したり、子どもたちの内面に響くような、生活に地続きの知識を伸ばす必要があると考えている。

中期的目標には、「Inclusion(インクルージョン)を実現する」「Competency(コンピテンシー)を育てる」「Democracy(デモクラシー)を育てる」を掲げている。まずは生徒を受け止める関係性を構築し、教員の専門性を生かして糸口を探し、インクルージョンを実現するという、コンピテンシーを育てる上でリテラシー改革が各教科の中でできないか検討するという、デモクラシーを育てるときに誰に向けて意見を言うのかも考えていくということを意識していきたい。また、別紙配付資料にある通り、「ステップスクールの7つの視点」を意識して教育活動にあたるように教員にも周知しているところである。

(1) の質疑・応答

Q1：田中委員「コンピテンシーの育成は非常に困難である。生徒の力に差はあると思うが、文字は読めても意味も理解できるかどうかということについて、一人ひとりが理解できるようになるためにどのような手段があるか。“ステップスクール7つの視点”の5つめにあるように、“対話が本校教育の根幹”というのがカギであると思う。対話形式をいかに授業に入れていくか。授業の内容を理解してもらうことと、対話を取り入れることをどのように実現しているのか」

山田校長「対話で大事なものはレスポンスである。いわゆる“ちゃんと答える”こと。生徒には、なぜ？と聞かれたことに対し自分の考えを整理して答えることができる力を身につけさせたい。そうすると思考力・判断力につながる。」

田中委員「生徒たちの限られたボキャブラリーの中で、どうしていくのか。」

山田校長「生徒とやりとりすること自体が練習になると考える。面接練習において、どうして？に答えられるように練習するのと同じ。授業では、知識でいっぱいにしてしまうと、そのようなやり取りを考える余地が生徒の中になくなってしまっているので、授業の余白を作ること重要。授業の余白の中で、対話の要素を取り入れていきたい。」

田中委員「からかいの文化やおふざけの文化ではなく、問題の本質を考えることが恥ずかしいと思われぬように、まじめに意味を語ったり、その子なりにしゃべれる空気づくりが一番難しい。それが授業で工夫しているところなのではないか。」

山田校長「その通りで、本校の生徒は間違ふことを恐れていない。見当違いの答えでも自信持って発言している様子が見られる。本校の特徴だと思う。全くの間違いの回答に対しても、おしい！と生徒をその気にさせている先生を見て、間違っていたとしても恥ずかしながらに言える雰囲気を作られていると感じた。」

Q2：高見委員「成人識字教育について、最近の若い子はすべてを「ヤバイ」という表現で済ませたり、若い子にしか通じない表現をしている。学校での教育と社会に出てから気づく、例えば敬語が使えなくて困るなどのズレが生じているのではないか。」

山田校長「敬語を習いたかったという声はよく聞く。高校にいるうちに敬語を習いたいと言ってくれたら良いのにも思うが、そもそも学校を出てから気づくことでもある。在学中に教えようとしても学校の中ではなかなか使おうとしないし、敬語の指導を徹底しようとする学校から逃げてしまう生徒もいるのではないか。成人識字の問題についても、字が書けない大人に対して小学校の教科書を渡しても面白くないので続かない。その人の年齢に応じた内容で学ばないとおもしろくないので習得に繋がらないということ。スキルとしての識字と、意味の理解としての識字は、子どもの場合、スキルが先で意味の理解が後という順番で習得されるが、大人は同時に理解していくものである。高校生は大人なので、スキルだけを先に教えるのではなく、生活の中や、必要に迫られたときに同時に習得していくことで効果が高まるのではないかと考える。」

Q3：稲嶺委員「エンパワメントスクールからステップスクールへ、どのような違いがあるのか。」

山田校長「2015年に基礎基本のやり直しをするためにエンパワメントスクールがスタートした。不登校経験や軽度知的障がいのある生徒を対象にして小3からの内容の学び直しを行うこと、また、正解のない課題にも取り組もうという趣旨で設置された。ステップスクールでは、さらに学習条件を緩和している。1クラス30名にして、多様な生徒（知的障がいのある生徒、幼児期の虐待など逆境体験がある生徒、外国にルーツのある生徒など）を受け入れ、授業開始を9時45分に遅らせる工夫や、地域連携本部をつくり子どもたちを地域・学校・家庭で見守る体制を整えるなどの取り組みを独自に行っている。2年次では、『にしなり学』において、地域の食肉文化からホルモンを使った調理実習や革を使った靴づくりや太鼓の体験、地域のボランティアに参加するなど、西成の地域に関連する事柄を10科目から選択して学ぶという授業を行っている。」

稲嶺委員「昨年度の進級率は88%とあるが、ステップスクールになる前はどうかだったのか。」

山田校長「もっと低かった。生徒本人のせいではない家庭の事情や様々な理由の進路変更もあるので、数字で表すことが適切ではないかもしれないが、9割の生徒が進級できたらと考えている。」

Q4：稲田委員「不登校の問題は中学校でも深刻である。中学校の中でも居場所を作っていく方法を模索しているが、何か手立てはあるか。」

山田校長「居場所をつくるというより、学校は生徒たちの“居場所を気にしているよ”という雰囲気があるかどうかが大変だと考える。居場所は本人にとって心地よいかどうかなので。本校では、渡り廊下にくっつかハイテーブルとイスを設置しているが、朝の時間や休み時間にほぼ埋まっているので、そういう場所が必要なのだと感じる。廊下のイスやテーブルが、教室より居心地がいい場所になっている。となりカフェをはじめに作ったときは、生徒を甘やかしてどうするという教員の声もあったが、甘やかすだけではないという意識が芽生えた時、生徒の居場所ができたときに校内のムードが変わっている。教員の生徒に対する視点が変わっていると思う。教員の視点が変わったことで、学校の価値観が自由になり、学校の方向性が変わった。学校がやわらかくなることで、解決できることは増えると思う。」

(2) 生徒の現状について

①各学年の様子

<3年より>

- ・213名入学。170名が3年。毎年20名ずつ減ってしまった。
- ・学年目標は「想いを行動に変える」
- ・課題は欠席数。去年は個人で100日を超えて、2年間で190日欠席している生徒もいる。家庭訪問等もして何とか支えている。
- ・その反面、30人以上が無遅刻無欠席。
- ・進路の取り組みとして自己PRの作成に取り組んでいるところである。
- ・仕事理解ガイダンスでは30名の欠席があるも有意義な時間が送れた様子だった。

<2年より>

- ・目標は「いまやる！すぐやる！最後まで！～やってみなはれ～」
- ・前に出て話す生徒が増えた様子。
- ・インターンも控えているので進路活動にむけて前向きな様子である。反面、インターンに不安を感じている生徒もいるので激励中。

<1年より>

- ・目標は「We can do it！」
- ・160名入学。無遅刻無欠席60名で全体的に出席率高い。
- ・自分の高校生活を充実させたい。学校をよくしたいという意欲的な生徒が多い。
- ・SCの利用も生徒が積極的に行っている様子。登校率につながっているのでは。

②人権アンケートについて

<こども人権室より、アンケート結果・分析>

- ・堺市、他市を合わせて3割。去年は2割。増加傾向にある。他地区から希望してくるので今後も増える見込みあり。
- ・問3については肯定的意見10%増加。
- ・問4については、友人等が多いか？
- ・問5についても同様。ただし傾向については昨年と変わらない。
- ・問6について困ったことがない一方相談していないが多い。
- ・経済状況や余暇のわかる質問も。問7アルバイトの業種を追加。飲食店多い。3年になると業種にバラつきも出てくる。
- ・アルバイト代の利用は自分のことや学校で必要なものが多い。が、一定数家庭に納めている生徒も少なからずいる。
- ・昨年と比較してアルバイトしている生徒人数は若干減ったか？
- ・食事について、1日1食が数名程度いることがわかった。朝食を摂っていない生徒は2～3割程度。
- ・自身の経済状況について。約半数が肯定的意見だが、思わない生徒も数多い。わからない、という生徒も。
- ・学習環境（家）について、各学年約3割が自分の部屋がない。
- ・WiFiが使えない（家）昨年3割だったが、今年度はほぼ全員が使えている様子。無料で使えるツール、サービスができたのか？
- ・1年は比較的早く寝る生徒が多い傾向。23～0時に寝る生徒が約半分。
- ・得意、不得意教科については国語、体育多い。2割は「なし」。
- ・質問21-1、1年生の回答で西成高校に行くことをバカにされた。西成なんか絶対行きたくない。と言われている様子。ここ数年そういう声は聞いていなかったが、以前からも言われた生徒はいるのではないか。
- ・質問24、入学後に西成高校生として嫌なことを言われた生徒が多くいる。1年43名、2年36名、3年35名。

(2)の質疑・応答

Q1：堂上委員「路線図が読めない生徒とは？」

楽指導教諭「自転車で移動できる範囲で生きており、公共交通機関を使用した経験がないか、浅い。特に乗り換えなど、逆ホームにのることも。」

西田委員「機能的識字としての課題でもあるだろう。」

(3) その他

49期生の進路状況について

- ・就職7割、進学2割、フリーター1割。フリーターは選んでいるのではなく、欠席日数が多すぎるので卒業目標が多数。
- ・定着支援については昨年同様LINEで追いかけていく方針。ネガティブな回答については対応を図る。進学については慎重に行う。

〈進路保障室からの報告に対する質疑・応答〉

Q1：高見委員「障がい者就労5名については、特に問題なく斡旋で大丈夫か？定着支援については辞めたい理由などは？」

山本教諭「就労実習を経て受け入れ可能であれば就職。定着支援について、タイル工に就職したが、高所恐怖症だったなどのミスマッチだった。事前に事業所から説明もあったが実際にはイメージと違ったとのことだった。」

Q2：西田委員「すでに辞めてしまった生徒の理由とは」

山本教諭「本人のモチベーションがもたなかった。というケースもある。」

Q3：西田委員「進学して退学したケースは？」

山本教諭「こちらもミスマッチ。授業や学校が思っていた感じではない。専門学校であったので1日欠席しても思っていたより厳しかった、など入学してから実感したよう。事前にイメージを持たせて話をしていく必要がある。」

Q4：稲嶺委員「ダメだった生徒にサポートはあるか」

山本教員「相談の窓口にはなるがその先の活動については原則、自分で行わせるようにしている。」

〈閉会に際して〉

山田校長「次年度に向けてステップスクールについての評価をしていきたい。ステップスクールに関するシンポジウムも計画中である。」

以上